

# サスケ、サルを追え



ミカンを収穫する石本さんと番犬修業中の紀州犬のサスケ＝三重県紀宝町で

んでいる。名前は「サスケ」。好物のミカンをほお張る姿が愛らしい、雄犬だ。「犬猿の仲」の効果で、特産のミカンを守ってほしい」。そんな農家の期待を担い、今夏にデビューする。

(熊野通信局・福永保典)

## 紀州犬 ミカン農家で修業中

ン畑でサルやイノシシ、ハクビシンなどの被害が深刻になったのは十年ほど前から。防護柵を設置したが毎年、収量の一、二割に被害が出る。特にサルは最近、ハウス内にも侵入し、収穫直前のミカンを食べへ荒らす。

石本さんの果樹園には、ハウスが五棟（一棟十ア）あり、一年を通じ、さまざまな品種を収穫する。石本さんの腹つもりでは、今夏にまず、一棟の外周りを囲んだワイヤにサスケをくさりてつないで番をさせる。その後、棟ごとに異なる収穫期に合わせてサスケも移動。いずれはミカン畑全体をフェンスで囲み、中で放し飼いにし、獣害を防ぎたいという。

そんな石本さんの悩みを聞かされた隣町、御浜町阪本で米や野菜を栽培する農業亀田昭治さん(セシ)。日本犬保存会県支部紀州分会の会員でもあり、地元で「オオカミの血を引く」との言い伝えがある紀州犬を三十年以上前から番犬にしてきた。阪本地区が発祥の地といわれ、勇敢で主人に忠実という性格そのままに、飼い犬の七匹は獣が出没すると激しくほえて威嚇する。亀田さんは「ミカン畑でもきつと活躍するはず」と昨年十一月、生後一カ月半の子犬を石

紀宝町のミカンの生産量は年間約千二百トと県内有数を誇るが、ミカン農家八十五人のうち、四十歳以下は七人。高齢化、後継者不足も問題だ。石本さんは「サスケがミカンを守れば、モデルケースになる。獣害を減らして農家の経営を安定させ、若者の雇用につなげたい」。傍らのサスケに熱い視線を向けた。



津市◎  
三重県  
熊野灘  
御浜町  
紀宝町

### 愛知で民家火災

平方メートルを焼き、二時間後に鎮火した。

された水野さんが押し込められているのを帰宅した同

消防作業中の一瞥から月